

最上川文化遺産とその活用をめぐる提言

菊 地 和 博

本稿を綴るにあたり

本稿はつぎのような内容で構成した。第一に、かつて最上川舟運によって発生した文化の実態、その結果生み出された文化の遺産についてまとめ、分析したものである。第二に、その文化遺産は今後どのように活用されていくべきかの視点や方法を明らかにし、それにもとづく具体的な提言を示した。

最上川の文化遺産は過去のものとして語られるのではなく、現在の生活に限りなく近づけ、どうしたら今に活かすことができるのかを考えなければならぬ。また、そのことに触発されているいろいろな取り組みや運動が起こり、あたらしい私たちの最上川文化が創造されることを期待して論述した。

一、最上川文化が生まれる背景

寛文十二年（一六七二）、河村瑞賢によって西回り航路が整

備され日本海海運が発達すると、最上川舟運と一体となった遠距離間流通経済のルートが確立した。京都・奈良・大坂などの上方の物資は、北前船に荷積みされて日本海を北上して酒田湊に到着した。物資はさらに川船に積み替えられて最上川を遡り、内陸地方の河岸に下ろされたのである。これとは逆に、最上川を下る川船に積み込まれた米や出羽の特産物は、酒田湊を経て日本海を南下して上方に運ばれた。

最上川舟運で特徴的なことは、商人や地主などの民間レベルでの活発な交易活動が行われたことである。これは岩手県や宮城県を流れる大河北上川などにはみられなかった最上川固有の側面である。このため多彩な文物の交流や、それにともなう地域文化への触発がなされたのであった。

このように、最上川は日常的な生活物資を大量に運ぶ道であったのであるが、一方ではそれとともに文化が行き交う道でもあった。ここでは、他地域から一方的に文化を受容しただけではな

く、在地文化が触発されあらたな文化の展開という側面や、地域社会に融合して新たな民俗文化として定着したという事実を見逃してはならない。さらに、当地域からもオリジナルな文化を発信・創出したということを強調しなければならない。

したがって以下に示すように、最上川は文化を運んだ道というよりも相互的な「文化交流の道」であったといったほうがより実態にふさわしいのである。

二、受容した最上川文化

地域の文化の受容という観点に立ち、最上川舟運によってもたらされた文化財を取りあげてみよう。

(1) 仏教美術文化（仏像）

京都あるいは江戸で作られたより優れた仏像が、海運と舟運によって運ばれているものは次のようなものがある。

- 1 釈迦涅槃像（大石田町、乗船寺）
- 2 捻花釈迦如来座像（東根市沼沢、仏心寺）
- 3 胎蔵界大日如来像（中山町長崎、長台寺）
- 4 仁王尊二体（羽黒町手向、黄金堂）
- 5 將軍地藏菩薩像（天童市道満、新源寺）
- 6 五百羅漢（山形市山家金勝寺、高畠町金原玉龍院、鶴岡市大山善宝寺）など

(2) 鋳物文化

最上義光は文禄元年（一五九二）に、山形の城下町を整備するにあたって、銅町を設けて鋳物職人を住まわせている。職人達は大型の梵鐘などの鋳造技術はまだ持たず、比較的小型の仏具や鍋、釜などを製造した。寛文十年（一六七〇）作の谷地の長楽寺の鐘と同十一年作の山形の長源寺の鐘の二例を除き、山形周辺の寺院の梵鐘は、正徳年間（一七一〇―一七一五）あたりまでは、京都・大坂・越後などの鋳物職人の製造によるものとみられる。現存する主な梵鐘はつぎのとおりである。

- 1 山形市専称寺 慶長十一年（一六〇六）京都三条金座
天下一道二作
 - 2 山形市宝幢寺 同上
 - 3 山形市光善寺 元禄十一年（一六九八）京都三条金座
和田信濃大掾藤原国次作（藤原国次は村山市父母報恩寺の銅造阿弥陀如来座像も制作した）
 - 4 山形市称念寺 元禄十二年（一六九九）京都堀川住
筑後大掾常味作
- つぎに戦時供出などで現存しない梵鐘はつぎのとおりである。
- 1 大石田町浄願寺 寛永八年（一六三一）越後高田
藤原宅次作
 - 2 大江町巨海院 元禄十年（一六九七）京都堀川住

筑後大掾常味作

3 東根市仏心寺 正徳四年（一七一四） 京都三条釜座

和田信濃大掾藤原国次作

4 山形市円光寺 正徳五年（一七一五） 同上

5 山形市等栄寺 享保四年（一七一九） 同上

6 村山市葉山大円院 元禄十年（一六九七）

京都制作（作者不明）

(3) 石造文化

瀬戸内地方や北陸地方産の自然石が船によって運ばれ、庭石・石灯籠・石鳥居・墓石などの素材として用いられている。比較的小型の石材は船の重心を低く安定させるため、重い陶器類とともに船底に積まれた。大型の石材は筏の底に吊り下げ海中の浮力を利用して運んだと考えられる。石材は、産地で加工し分解して運んだものと、自然石のまま当地方に運んで、のち上方の石工が加工したものと二種あったであろう。現存するものはつぎのとおりである。

① 河北町下楨白山神社の石灯籠

② 山形市十日町佐藤利右衛門家の石灯籠

③ 山形市六楯八幡神社の石灯籠及び狛犬

④ 山形市蔵王山頂の狛犬

⑤ 山形市宮町鳥海月山両所宮の狛犬

⑥ 中山町岡柏倉九左衛門家の石灯籠

⑦ 鶴岡市馬町梶尾神社の石鳥居

(4) 陶磁器文化

船の安定のためには、船底に石材とともに陶器を積み込む例があった。いわば重しとして、主に重量のあるものが運ばれるのであるが、それとともに名だたる高価な陶磁器も航路沿いの各地から運ばれたのである。

それらの中には、近代に入って名器として売買の対象になり持ち主を替えたものも少なくないが、依然として最上川河岸付近の集落や旧家の土蔵などに所蔵されている。

中山町は長崎河岸で賑わい、谷地や大石田と同じように物資の集積が行われ、最上川文化の足跡が色濃い集落である。町内には次に挙げる陶磁器類が個人蔵として所蔵されている。各地域から伝わり現存しているものをあげてみよう。

〈九州地方〉

- 1 鍋島焼 2 唐津焼 3 伊万里焼 4 薩摩焼 5 苗代川焼
- 6 三川内焼（平戸焼） 7 波佐見焼 8 二川焼 9 大外山焼
- 10 小鹿田焼

〈四国地方〉

- 1 能茶焼

〈中国地方〉

1 萩焼 2 備前焼 3 丹波焼

〈京都〉

1 清水焼

〈中部地方〉

1 瀬戸焼

〈北陸地方〉

1 九谷焼

(5) 建築文化（蔵座敷）

蔵座敷とは、土蔵の中に座敷をつくり上客や家族の居住に使用したものである。上方の蔵座敷の始まりは桃山時代あたりからと考えられており、外壁は白が一般的である。山形県内にある蔵座敷・仏蔵・店蔵もほとんどが白壁で、内部構造的に見ても上方の影響と考えられている。

山形県内に現存する蔵座敷は、「山形県蔵座敷等調査報告書」（山形県教育委員会）によれば昭和五十八年までに六五六棟があるという。このうち江戸時代代のは七七棟で全体の十一％で、あとは明治時代に入ってから建造されている。その分布は限定的で、最上川沿いの内陸部で羽州街道や六十里越街道沿いの紅花商人や豪農の屋敷を中心に存在している。ちなみに、山形市・山辺町・東根市・村山市・尾花沢市・寒河江市・大江町・西川町の五市四町に全体の約八十四％の蔵座敷が集中している。

蔵座敷の扉の掛金具に上方の職人名が見られる三例をあげる。一つは、山形市十日町の佐藤利右衛門家のもので、右取手に「大坂」、左取手に「鍛冶 亀右衛門作」とある。二つは、天童市五日町の相沢兵助家のもので、「大坂 鍛冶 亀右衛門」とある。三つは、天童市五日町の旧佐藤伊兵衛家のもので、右取手に「伏見 鍛冶 八兵衛作」、左取手に「大坂備後町 井池」とある。

三、文化受容をとらえる視点

(1) から(5)まで上方から受容したものを示したが、これらは遠距離から当地に運ばれたたんに物的存在ではない。つまり、物に係わる技術や精神に価値を見出し、これらを「文化」として受容したところに意義があると考えなければならぬ。逆に言えば、技術や精神に価値が見出されないものは、いくら上方のものといえども運び込まれなかった、あるいは運ばれても消え失せたと考えるべきであろう。そうした視点に立つとき、これらを持ち運んだ人々の心や、受け入れる当地の文化的状況と精神風土というものを考えなければならない。

仏像についていえることは、より優れた在地仏師が育っていないなかったという指摘もできるが、それとともに、やはり当地の人々の信仰心の篤さを取りあげるべきだろう。つまり、山形城主最上義光の寺社への厚い保護が下地となって、出羽の人々の

神仏への崇敬の心はかなり深いものがあつたと考えられる。それは、古くからある出羽三山信仰の伝統に根ざすものでもあろう。こうした信仰心の篤さが仏像崇拜・仏像移入となつて表れたといえる。

梵鐘については、特に上方職人の鑄造による梵鐘は音色のよさで聞こえたというが、名だたる名人の作品は、在地鑄物職人をおおいに触発し技術向上に役だつたはずである。享保年間以降は、内陸寺院の梵鐘は他産地のものが影をひそめ、山形銅町を中心とした、いわゆる地場産のものが増加することがそれを物語っている。このように、羽州山形の人々は文化をたんに持ち込んだり、受容しただけではない。学ぶべきことがらを摂取して技術向上に努め、地場産業を興しあらたに地域文化を創造することができたことに着目したい。

石造物については、より良い材質で作つたものを奉納して神仏を喜ばせ、舟運安全を願おうとしたとみることができる。そのことは、川や海での運搬業務にはかなりの危険がともなうものであつたことを示しているよう。また、大坂をはじめとする他地域の石工の制作技術や作風は、地元石工達にも良き刺激を与えずにはおかなかつただろう。

多くもたらされた陶磁器についても、当地域の窯場に良き影響を与えたに相違なく、日用雑器としての実利性よりも芸術品として、愛でる態度や鑑賞眼を育て、羽州人の風雅な心を育む

ことに貢献したはずである。

蔵座敷については、本来、土蔵は物資の収蔵や保管等に使用するいわば倉庫であり、日常生活には直接利用しないものだ。しかし、湿気を防ぐ・保温性が高い・熱を遮断するなどの効果が高い建造物である。そこで、夏はおおむね涼しく冬は暖かいという快適さと、他方では防火上の利便性に着目して作られたのが蔵座敷である。江戸時代から明治時代を通じて、蔵座敷を持つことは、いかなれば上流階級への帰属を誇示することの意味も持ち、舟運で財産を作つた商人達をはじめとする、当時のいわゆる旦那衆たちのシンボルのようなものであつたといえよう。

蔵座敷ないしは土蔵で見逃すことができないのは、貴重な文物の保存にきわめて有効であつたということである。その好例が河北町谷地の雛人形である。谷地の雛人形は、商人達が所有する適度な室温と湿気を保つ蔵によって守られたといえる。そのほかの美術品なども同じことがいえる。このように蔵座敷は当地域にあつて上方の世界を演出するばかりでなく、実際に上方文化の保存や融合・定着に役立つたのである。

最後に、最上川を通じて伝来した文化として補足しておきたいものに、キリスト教文化がある。寛永三年（一六二六）に、フランススコ会派の管区長バアレ・ド・エゴ・ド・サンフランシスコを中心とする数人の伝道者が、奥羽伝導を目的として長

崎郊外を船で出発、日本海を北上して酒田湊に到着している。さらに船で最上川を遡って山形の中野まで来て都心部に潜入し、布教活動を展開している。しかし、キリスト教はその後激しい弾圧にさらされ、処刑や追放などの受難の歴史が耐えなかった。

四、発信・創出した文化

(1) 紅花染色文化

江戸時代、羽州の特産物の筆頭にあげられるものは紅花であることはいうまでもない。内陸地方産の紅花は「最上紅花」と総称され、江戸時代に入って間もなく質量共に全国一位となった。紅花は乾燥した干花の状態で梱包して輸送した。大石田から船で下って日本海を渡り、さらに琵琶湖を縦断して京都に送られた。最終的には主として京都の紅粉屋や紅染屋で口紅や衣類の染料とされ、全国的な規模で華やかな染色文化を創出したのである。

それだけではない。京都で染色された華麗な紅染の衣類は、山形の紅花商人たちが買い求めて持ち帰ったものが多数あり、それらは現在、旧家や芸能装束として寺社などに残っている。たとえば、上山市の小倉芝居衣装保存会、米沢市の上杉神社、酒田市の黒森歌舞伎保存会、河北町谷地の舞楽保存会、櫛引町の黒川能保存伝承事業振興会などにすばらしい紅染衣装が保存されている。

特に黒川能装束については、現存する装束の大半が江戸時代中期以降のもので、これらは黒川能を保護した藩主酒井家からの拝領品であり、その中には紅染装束が約一〇〇点（平成三年現在）ほどある。

こうして、紅花は染色素材として衣料文化に貢献しつつ、当時の人々の色彩感覚を豊かにすることにも大いに貢献しただろう。

以上のことは、紅花の原料供給地山形と需要地の上方との間に、商業活動を仲立ちとした文化交流が成り立ったとみることができる。最上川が文化を運んだ道だけではなく、「文化交流の道」であったと先に記したのはそういう意味からである。

(2) 青苧衣料文化

青苧とは、別名苧麻・からむしともいい、イラクサ科の多年草である。山野に自生し高さ一〜三mぐらいに成長するが、その茎の表皮を剥いで残る白い繊維は長くて強靱で美しい光沢を有し、古くから衣料の原料とされてきた。また、汗を吸収して発散させ涼感があるので、帷子など夏の衣料や武士の礼服である袴として需要があった。越後縮・越中八講布・能登縮・近江麻布・奈良晒など、全国に名高い麻布の特産品は、いずれも青苧を原料とした織物なのである。麻と青苧は本来異なる植物である。

青芋の特産地は、東北では羽州山形と会津が特に有名であった。羽州山形の村山地方産の青芋主要産地は、月布川流域（現大江町）、五百川郷（現朝日町）、寒河江川上流（現西川町）、その他最上川流域、葉山山麓、奥羽山脈西麓などである。他方、米沢の主要産地は、白鷹町・長井市・南陽市などであった。

これらの産地では、青芋の表皮を剥いで残る靱皮繊維を干して乾燥させ、いわば半製品として新潟・北陸・近江・奈良など各地の麻織物産地へ送った。江戸時代は紅花と青芋が羽州の二大特産品として肩を並べ、最上川舟運を通じて紅花は染色文化、青芋は衣料文化を創出したといえるのである。

また、青芋衣料は紅染の場合と同じように、逆に最上川を遡って羽州にもたらされており、ここでも文化の相互交流が行われているとみることができる。一面では、青芋は当地では庶民衣料としても活用されていることを見落としてはならないだろう。

五、地域に融合・定着した文化

最上川舟運によってもたらされた文化が、地域社会の生活文化に融合し、やがて定着していったものも少なからずある。それは現在まで地域固有の民俗文化として根づいている。その事例を以下に示す。

(1) 京都産・江戸産の雛人形を購入したことから始まる雛祭りの文化がある。各家々はもちろん、地域をあげての賑わい

として河北町谷地の雛祭りが代表としてあげられる。

(2) 京都祇園祭の影響を受けた新庄祭り・酒田山王祭り（現在は酒田祭り）、尾花沢祭りなどの祭礼文化が、すでに夏祭りとして定着して久しい。

(3) 香川県琴平町に鎮座する「金刀比羅宮」を本社とする「こんびら信仰」は全国に広がり、石碑の「金比羅」は最上川流域のみならず、支流奥深くまで建立されている。「金比羅樽流し」の信仰も各地域でかつて盛んであった。

(4) 言語文化としての上方言葉が山形県内にも定着し、地域では無意識に使用されているものも多い。

(5) 尾花沢雅楽・光徳寺雅楽などは、京都経由の雅な音楽文化として今も奏でられている。

六、最上川文化遺産の活用

新たな最上川文化遺産の活用についてつぎのように考えられる。一つは、蓄積された最上川の歴史性と無縁なところに見出すのではなく、最上川の過去の歴史の奥深いところから核心部を掘り取り、地域資源として実生活に即した新しい意味付けを行うということである。言い換えれば、舟運文化の現代的活用を通して最上川の再発見といえる。

二つは、過去にヒントを求めつつも、必ずしもそれにとらわれることなく、現在の視点で捉えた最上川文化を創造していく

ことである。そこでは自然環境と歴史文化を融合させる視点をもちたい。

最上川文化遺産活用 of 具体的取り組みは、「やまがたづくり」「地域づくり」という視点に立ち、山形県民の大きな文化運動として継続的に取り組まれることが望ましい。これまで、行政主導のプランづくりはあっても、実行されない部分を多く残してきたことの反省を踏まえて、市町村単位において、企画段階から一般市民の参加を得た裾野の広い草の根的な取り組みが求められる。

(1) 雛文化事業の一体化と発信

山形県内の村山地域十四市町商工観光課で組織する蔵王・月山・朝日観光協議会は、一九九六年（平成八年）から「雛のみち」の広域観光キャンペーンを展開して、各資料館や旧家における雛かざり・雛祭りを観光ルート化することによって、山形県内の雛文化を内外にアピールすることに努めている。平成十三年度は二十のポイントで雛人形の公開が行われ、これにタイアップして山交バス株式会社による一か月間予約制定期観光バスも運行した。庄内の酒田市と鶴岡市でも、同様に「庄内ひな街道」と銘打って、一斉に雛飾り・雛祭りを公開している。これはまさに、最上川舟運がもたらした雛文化の継承・発展である。

そこで、この村山地方と庄内地方で行っている雛飾り・雛祭りの観光ルート化を最上地区や置賜地区に拡大し、「山形県の雛文化」として最終的に一本化をはかることである。現在両地区では資料館等において雛の公開展示を行っているが、単独で行うよりも「雛のみち」や「ひな街道」と一体的に企画したほうが集客は見込まれるし、なによりも山形県の雛文化として、県民の認識が一層高まる。こうして四地域の雛文化が文化・観光ルートとして一体化すれば、県外に対して雛文化を総合的に発信しやすくアピール度合いは極端に高まるだろう。

(2) 紅と雛文化フェスティバル

山形県内四地区の代表的な雛人形を一堂に展示公開する雛文化フェスティバルを開催する。優雅であり、かつ豪華な内裏雛をはじめとする衣装人形群は、おそろく壮観さを極めるはずである。この展示を通じて雛文化への理解が得られるとともに、人形が着衣する紅花の染色衣料文化へのあらたな興味関心も得られるであろう。

ただし、このフェスティバルが、たんに華やかで高貴な文化の賞賛に終わらないよう、最上川舟運と地域文化をより深く考えるきっかけとなるような企画でなければならない。

(3) 青芦文化ルネッサンス運動

先に記したように、最上川は紅花の染色文化とともに青苧衣料文化を創出した。本県では高度の織布技術を持たなかったため、原料である良質青苧を大量に生産地に移出することを主な任務とし、栽培と半製品労働に従事したのであった。全国に名高い上布と呼ばれる青苧衣料を生み出す発信地の役割を果たしたのである。

さて、かつての良質の青苧栽培地であった南陽市では、一九八九年（平成元年）に「ふるさと創生事業」の一環として、「南陽市青苧製品開発推進協議会」を発足させた。江戸時代、この地域は北条郷と呼ばれて置賜地域でも下長井方面（現長井市と白鷹町）とならんで優れた青苧を生産する地域であった。その伝統を地域活性化・地域づくりの原動力にしようと、久しく途絶えていた青苧栽培を復興し、さらに織布技術を研究して製品開発に結びつけていこうとするものであった。

技術の伝承が中断していたために、復興には大変な困難を伴ったようだが、関係者の伝統文化復興への熱意と努力で、製品開発と販売を軌道に乗せることができた。製品は開発推進協議会の意向を受けて、「青苧工房」で制作され、商品名を「置賜の青を織り 夕づる」とした。しかし、その後、財政的事情により開発推進協議会は一九九七年（平成九年）に解散し、伝統文化復興と地域活性化の熱気は下火となった。それでも、「青苧工房」では川合ひさ子氏による単独事業として、青苧商品製作

は今なお続けられていることは注目しなければならない。

最上川文化の継承・発展を考えるとき、絶対に見落としてならないのがこの青苧衣料文化である。県民の目は、とかく華やかである紅花に向きがちであるが、紅花と共に最上川交易を支えた二大商品の一つである青苧の存在の大きさに改めて気づかなければならない。そう考えるとき、南陽市としての青苧の取り組みが中断したことは誠に残念であり、川合氏個人の努力によってかろうじて維持されている現状は危機的状況といえる。最近「古代織り伝統を守る会」という支援組織が生まれたが、力強い母体となるには今一步のところである。貴重な最上川文化の継承という視点で、憂うべき青苧の現状に対して対応を急がなければならぬ。

青苧文化の復興は、文字どおり「青苧文化ルネッサンス運動」として展開していきたい。出羽国山形は、原料を提供した青苧衣料の生みの国である。最上川文化の大きな柱である青苧に光を当てるための一つの方策としては、越後上布（小千谷縮）、能登上布、近江麻布、奈良晒など、本来青苧を原料として成り立っていた高級青苧衣料を県民が鑑賞する会を設ける必要がある。県内巡回展も考え、県民に徹底して理解をはかる。また、川合ひさ子氏や米沢市の原始布・古代織参考館などとも連携した青苧の織りの技術や作品の展示会も必要である。

(4)最上川文化周遊の道

舟運時代の船着き場・特産品栽培地・上方文化交流関連地・エピソードや舟運ゆかりの地など、関係する事柄すべてを網羅する地図を作成し、山形県の歴史学習と観光周遊に役立てなければならぬ。

(5)「最上川メモリアルデー」(最上川記念日)の設置

江戸時代の藩政期は、置賜(上杉藩)・村山(幕領・各藩入り組み支配)・最上(戸沢藩)・庄内(酒井藩)の四地域の分割支配が長く続いたため、それぞれ固有の文化圏を形成してきた。しかし一方で、最上川がそれらの異なる行政区域の間を貫流すること、流域を中心に緊密な関係が築かれてきたのも事実である。いわば、最上川が異なる社会を繋ぎ合わせる接着剤の役割を果たしてきたとも言えよう。ここで最上川文化の発掘・創出の方策を考えるにあたっては、このような山形県の歴史的経過を踏まえないといけない。

そこで、最上川はこの四地域を貫流する県民共有の「母なる河川」であり、四地域が共通の目標を掲げて文化運動ができるものは「最上川」においてほかにない。このことをあらためて認識し、最上川文化運動を展開するうえでの起点としなければならない。

このことから、「最上川」への取り組みは県下一斉方式また

は四地区単位で行い県民総参加をめざしたい。そのためには、まず、「最上川メモリアルデー」というようなコンセプトが必要となる。そこでは、最上川の文化に関する全県統一企画と、地区または市町村それぞれオリジナルな行事を企画し並立させる。これらは、市町村によっては、カヌーおよび舟による舟下りなどのスポーツ行事や河川美化運動と連動して行うことも可能であろう。

最上川への四地域住民の思いを一つにした事業を展開することによって、そこからあらたな最上川文化を創出したい。最上川に面しない市町村は支流での行事を企画して実行する。これらの行事は全国に向けてPRし、他県の参加者を広く募るべきである。他に、「最上川ウィーク」(最上川週間)を設置することも考えられよう。

①市民参加型の「最上川やまがたづくり実行委員会」の組織化

置賜地区実行委員会―各市町村実行委員会

山形県実行委員会―村山地区実行委員会―

〃

最上地区実行委員会―

〃

庄内地区実行委員会―

〃

②企画例

県としての統一企画と地区単位・市町村単位の個別企画が考えられる。現在も単発的に行われる俳句会や短歌会、その他の催し物は、可能な範囲でこの企画と一体となった取り組みにし

たい。

- ・芭蕉に学ぶ俳諧の心（最上川俳句会）
- ・小松均の絵画に学ぶ（最上川写生会）
- ・斉藤茂吉とともに詠む（最上川短歌会）
- ・最上川を写す（写真コンテスト）
- ・創作「最上川」（自主制作ビデオ上映会）
- ・創作「最上川物語」（民話・童話・絵本）
- ・主張「私と最上川」（弁論会）
- ・「私と最上川」（作文発表）
- ・最上川文化シンポジウム（四地区会場）
- ・最上川文化展（巡回展も含む）

(6) 東北地方「河川文化を発信する集い」の開催
互いの情報発信の場としながらも、他地域の河川文化への取り組み状況も学び合う学習の場とする。

(7) 「最上川文化通信」の発行
定期的な通信の発行は、情報発信の有力手段となる。県民の意識の高揚や全国に向けて最上川文化を発信する媒体として活用したい。

(8) 「最上川文化創造館」の建設

最上川の歴史と文化および自然が集約・体系化された専門的な学びの施設としての最上川文化創造館が建設されなければならない。この中には最上川の歴史と文化に関する文献をすべて整えた図書館が併設されることが望ましい。

さらに、最上川文化に関連する芸術文化の作品を展示したり、関係者同士の交流を深める施設としての文化交流室が設置されなければならない。ここで「最上川メモリアルデー」の県統一企画などが実施できるだろう。建設場所は、最上川が望める場所が最適である。候補地として、村山市大淀地区、大石田町、新庄市本台海地区などが考えられる。

(9) 『最上川文化研究』（論文集）の刊行
最上川の歴史と文化、自然について学際的に考察した研究誌を定期的に発刊して、最上川の再発見と最上川文化研究の向上をはかりたい。

むすびにかえて

最上川文化を過去のものとして、実生活の中にどう取り込んでいくか。このことは私たちが「自然」とどう向き合っているかという、とてつもなく重要な今日的課題でもある。河川環境美化の運動とともに、最上川文化運動を一体として起こす具体的方策を今後も考え続けたい。